

ジャナカ王がマントラの真の意味を学ぶ バーバ・ムクターナンダが語った物語を基に

その昔、現在のインドの北部で、正義のジャナカ王はヴィデーハの国を統治していました。王は、どのような状況にも高潔さと思慮をもって国王の任務を果たしました。ジャナカ王は金庫室に山のように積まれた金貨やルビーを持っていたましたが、その富への執着はありませんでした。彼はただ、最高の真理を知りたいと熱望していたのです。王はあちこちから来る賢人たちとその何千もの信奉者たちを礼遇することで知られ、盛大なごちそうと数十頭の象が入れるほどの大きなテントで彼らをもてなしました。目を輝かせ、心を躍らせて、ジャナカ王はサツツァングを楽しみ、客と共に至高なる自己について語り合いました。

毎朝、ジャナカ王は日の出前に目を覚まし、地味な僧侶の衣で身分を隠して静かに城を出ると、人目に付かない森の道を歩いて近くの川に歩いて行きました。そこで、王は川岸に古くからある一本のベンガルボダイジュの木の下に座って瞑想しました。ジャナカ王はどんなにこの独りでいる早朝を大事にしていたことでしょうか。時には深い瞑想の境地の中で、真理を垣間見ることがありました。そのような出来事は真理をより深く知りたいという切望を燃え立たせ、彼は気持ちを新たにし、ますます強い熱意で精神修行に励むのでした。

ジャナカ王は瞑想する前に、聖なる音節を繰り返すマントラ・ジャパを実践しました。王は目を閉じて、「ソーハム」のマントラ —— その意味は、私はそれである、私は真理である —— を唱えました。そのマントラは、ヨーギたちが彼ら自身の最も深い真理につながるために太古の昔から使ってきたものです。しかし、ジャナカ王は、偉大なヨーガの師たちが教えた伝統的な手法 —— マントラを心の中で唱えること、または内側から湧き上がるそれを聞くこと —— を使う代わりに、「ソーハム！ ソーハム！」と声の限りに叫び、彼の低く太い声は川を渡ってとどろいて、鳥を飛び立たせるのでした。

ある朝、王がジャパの修行に没頭している時、賢人アシュタヴァクラが川沿いの道を歩いて来ました。まだ少年でしたが、彼は真理の偉大な知者であり、悟りを得た存在でした。ですから、王が黄土色の衣をまとい、「ソーハム！」と叫んでいるのを見て、若い賢人は驚きました。アシュタヴァクラは、王の雷鳴のような声から、彼の真理を知りたいという純粋な切望を見抜き、王がそうできるよう助けることにしました。

賢人はジャナカの向かいに静かに座り、しばらくの間、彼が叫ぶのを見ていました。アシュタヴァクラは片手に水鉢を持ち、もう一方の手にはヨーガ・ダンダという、ヨーギがジャパや瞑想を行う時に腕や顎を支えるために使う T 字状の棒を持っていました。そして、アシュタヴァクラは叫び始めました。「これは私の水鉢です、これは私のヨーガ棒です！ これは私の水鉢です、これは私のヨーガ棒です！」彼はそれぞれの品をその名を叫ぶたびに頭上に掲げました。

ジャナカ王はこの見ず知らずの人物が、自分のジャパを甲高い声で邪魔するのにいら立ちながらも、目を閉じていました。「これは、精神修行をする私の貴重な時間だ」と、思いました。「狂人にそれを台無しにはさせない」。そこで、「ソーハム、ソーハム」と、いっそう大きな声で繰り返し続けました。すると、アシュタヴァクラはもっと大きい声で彼独自のマントラを繰り返し始めました。二人の声はエスカレートし続け、ついに王はそれ以上耐えることができなくなりました。王は目を見開き、向かいに座って大声でわめきながらヨーガ棒と水鉢を高く空中に掲げている少年を見ました。

「おお、見知らぬ少年よ、おまえはいったい何をしているのか」と、王は叫びました。

アシュタヴァクラは腕を下ろし、いぶかしげな笑顔で、「あなたこそ何をしているのですか」と尋ねました。

「私は、神聖なマントラ、『ソーハム』を繰り返している」と、ジャナカは事もなげに言いました。

「私も、真実を声に出しています」。アシュタヴァクラは顔をにっこりとさせて言いました。

「私は繰り返しています。『これは私の水鉢、これは私のヨーガ棒』と」

王は今や、いら立ちで体を震わせながら言いました。「愚か者！ 誰が水鉢とヨーガ棒はおまえのものではないと言ったのだ」

アシュタヴァクラは言い返しました。「おお、陛下。私は若造です。私は無知でも許されます。あなたはヴィデーヒ・ジャナカ、鋭く賢明な王です。なぜカバのような吠え声を上げる必要があるのですか。誰が、あなたは『ソーハム』ではない、あなたは『それ』ではないと言ったのですか」

ジャナカはこれを聞いた時、ボールが取り払われるのを感じました。すぐに、自分は「それ」と分かったのです。太陽の光、揺らめき輝く川、頭上の古木、目の前に座っている若者——自分が意識するすべてが神の完全さで脈動しているのだと。自分の存在の核となるところで、熱心に探し続けてきた、まさにその真理と自分自身は一つであると気づいたのです。

「おお、師よ」と、ジャナカは、若者への感謝にあふれる心で言いました。「あなたは私のマントラの理解を浄化してくださいました。あなたは私の内側にある真理を明らかにしてくださいました。どうやってお礼をしたらよいのでしょうか」

アシュタヴァクラは輝く瞳でジャナカを見詰め、大笑いしました。

「では、真理になるためにマントラを繰り返すのではなく、あなたはすでに真理なのだと知った
上でマントラを繰り返してください」



再話: Ian Arnold
挿画: Stella Sakshi Martinelli
表紙デザイン: Jenny Hira Tanner

© 2018 SYDA Foundation®. 著作権所有。